

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

【氏名】 鈴木恵可

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程 満期退学

【研究題目】 戦前期官展彫刻部にみる近代東アジアの彫刻家とその活動  
—日本留学および現地との回流を中心に—

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究は、戦前期日本の官設美術展覧会(官展)の彫刻部門に入選した、台湾・朝鮮・中国などの東アジア出身の彫刻家、およびそれら東アジア地域に滞在経験を持つ日本人彫刻家を対象とし、彼らの日本における美術活動(美術学校での学習、展覧会参加など)や、彼らが日本と各東アジア地域を回流するなかで、現地の展覧会やモニュメント制作にいかに関わっていったのかを明らかにするものである。これまで、東アジアの近代美術史研究において、彫刻分野は絵画と比べて研究の蓄積が乏しく、また現地側と日本側の資料を双方向から検討した研究が少なかった。本研究は、中国語や韓国・朝鮮語といった多言語の文献資料を活用し、日本帝国のみの視点に偏らない実証的な美術史研究に取り組みとともに、当時の近代彫刻界が、出身地のみで切り取ることの出来ない複雑な実態をもっていたことを明らかにする。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

戦前期の日本や東アジアの近代彫刻史研究における課題として、現存作品および作家の個人資料が散逸していたり、十分な整理がなされていない点が挙げられる。美術史研究は、実物の作品分析がひとつの重要な柱となるが、本研究ではこうした状況を踏まえ、実物作品の発見以外にも、当時の作品図版や雑誌・新聞等の文字資料、遺族等の保管する一次資料など、広範囲な資料の発掘・整理を通して、歴史学の手法も合わせた総合的な調査研究を目指した。なお、研究助成期間中は、残念ながらコロナの状況が改善せず、日本国内調査や韓国等での海外調査は実行出来なかった。また、居住地でも図書館の入館禁止や移動の自粛が行われた。そのため、論文輸送サービスや、書店・古書店の海外発送サービス等を利用して、可能な範囲での資料収集を試みた。主な内容と方法は以下の通りである。

(1) 文献資料調査: 彫刻家の展覧会入選記事、銅像建設関連記事、美術団体の活動等に関する新聞・雑誌記事、書籍の資料収集など。『朝日新聞』や『毎日新聞』の外地版(朝鮮、満洲版)の復刻版を、一ページずつ確認する作業を行った。また、『京城日報』『朝鮮日報』『毎日申報』等、一部韓国でデータベースが公開されている新聞については、「銅像」などのキーワードをもとに記事を抽出し、リスト化する作業を行った。

(2) 図版調査: 朝鮮美術展覧会の図録については、復刻版を利用し、彫刻部に入選した作家や作品をリスト化して、作家の履歴の整理を行った。また、東京文化財研究所所蔵の戦前期の図録が電子化されて一部公開されるようになり、それらの官展や彫刻関係の図録を網羅的に確認した。また、満洲美術展覧会についても、他の研究者の方からデータを一部提供頂いたり、古書店からの図録購入を行うことが出来た。その他、戦前期に発行された絵葉書(展覧会出品、銅像)等の購入によって、作品図版の収集にあたった。

(3) 訪問調査: 本研究に関連する作家の作品所蔵者二名を訪問し、作品の見学や撮影をすることが出来た。

## 【結論・考察】(400字程度)

本研究の調査を通じて、戦前期日本の官展彫刻部入選者のなかには、東アジア地域出身者やそれら地域に滞在経験を持つ日本人作家が多数存在し、彼らが日本の中心舞台である官展に入選し、そこからまた各地域に拡散して、現地の個展や展覧会といった美術活動に関わるなど、戦前期の東アジア地域において、

「近代彫刻」を取り巻く人材が多数回流していたことが明らかになった。日本人彫刻家の例を見ても、各地方から東京へと彫刻家が上京し、そこから東アジア地域へ出て行く例、また日本統治下の東アジアで育ち、東京へ渡り、再び出身地へ戻る例など、様々である。ただし、こうした現象は台湾と朝鮮に関しては顕著だが、中国大陸や満洲に関わる例は、現時点の調査においてはごく限られていると見られる。また、東アジアの各地域出身者は、現地ではその後著名な彫刻家となった例が多いものの、日本人彫刻家に関しては、一部の例外を除き、詳細な履歴や戦後の消息が判明していない人物が多い。こうした事例については、今後もさらなる継続的な調査が必要である。